

神国日本にコレラをいれてはならないと力説しているのは神道家としての面目躍如たるものがある。

この図録によって、たとえ展示品を目の当たりにする機会がなかったわたくしでも、同研究センターが佐賀学の解明や歴史文化の学術分野で地域貢献をしようとの意欲を十分にもちあわせている

ことを感ぜさせてくれる。

(深瀬 泰旦)

[佐賀大学地域学歴史文化研究センター、〒840-8502 佐賀市 本庄町1, TEL. 0952(28)8378, 2011年10月15日, A4判, 120頁]

宝月理恵 著

『近代日本における衛生の展開と受容』

本書は著者のお茶の水女子大学に提出された学位論文をもとにした著述である。本書のタイトルでもある「近代日本における衛生の展開と受容」は、近來の10年間で日本史においても医学史においても著しく関心がもたれたテーマであるといつてよい。日本医史学雑誌の書評においても、七木田文彦氏の『健康教育教科「保健科」成立の政策形成』や田口喜久恵氏の『近代教育黎明期における健康教育の研究』などの大著が並ぶ。この傾向は、本書を含めて医学や保健衛生と教育との関係を歴史的に問いただそうとする研究傾向が生じ、それらの研究者が医史学領域の中で仕事をし始めていることを物語るものである。

本書はその中でも最も広範な時代設定と多様な方法論が用いられている。この時代設定と方法論的特徴に視点を置いて本書を繙いてみよう。

本書の構成は、「序章 課題と方法」「第一章 近代医事衛生制度の成立と衛生思想」「第二章 学校口腔衛生の確立と歯科学の専門職化」「第三章 衛生経験の聞き取り」「第四章 新中間家族における母親の衛生戦略」「補遺 京城府の衛生経験」「第五章 身体化される／されない衛生実践」「終章 近代日本の衛生経験」からなる。

「序章」では本書の研究視点の提示が明確になされている。それは、一つはこの間の日本における衛生史もしくは社会医学史研究に広くみられる「フーコー・パースペクティブ」からの相対的離脱とそれにもとづく史実の再構成を図ろうとする視点である。M・フーコーが『性の歴史』を中心

とした著作を通じて明らかにした身体の規律化と主体化、そしてそれを手段とした生権力（生命管理政治）のあり方から個人と社会を読み解く視点に一定の意味を見いだしながらも、そこに個人を単に抑圧される存在としてのみ国家に対置する見方に限界を覚え、著者独自の視点として、「新中間層」「口腔衛生」「学校」「家庭」という舞台装置を設定し、これまでの学問的ストーリーとは異なるドラマツルギーを樹立しようとする。

第一章では近代日本の医事衛生制度の成立過程で萌生した種々の衛生思想とそれに関わる先行研究の論点をクリティカルに検討している。光栄にも評者の研究にも言及され、かつさまざまな視点からの衛生思想の分析が試みられているが、この点に関して言えば既知の学問的知見を自らの視点で再構成した感は否めない。史料レベルで衛生思想に関する新たな知見の提示は少ない。

むしろ本書の真骨頂は、第二章以降の学校口腔衛生の普及を主体とした日本国民の衛生経験の再構成の壮大な実験である。もちろんそこでは基本的な文献検索とその読解もともなっているが、有力な武器は「オーラルヒストリー」である。主に大正末年から昭和初年代に出生した男女の幼少期から青年期にかけての健康や衛生に関する経験を、口腔衛生や清潔行為、さらに健康優良児表彰（朝日新聞社主催の教育表彰事業）などの経験に関するナラティブをもとに、当時の青少年にとっての主に学校を中心とした「衛生世界」を再構成している。記述に際して学問的客観性を意識した

ためか、「極彩色」にとまではいえないが、相当程度に鮮やかな衛生経験の世界を再現している。そこに立ち現れた世界は、フーコー・パースペクティブに依拠した研究が理論的にとらえてきたような国家に管理される分断された個人の身体というような矮小化された個人像ではなく、そのような管理の網の目にとえられながらも、そのミクロな棲息世界の中でマクロな管理を相対化し、日常的な生を生きる個人とそのありようとしての健康への姿勢を描き出したものである。この視点は、これまでの衛生史・社会医学史研究の中には明確には見いだせなかった学問的視座である。

著者をしてそれを可能ならしめたのは何か。それは、著者が医学史や衛生史とともに家族社会学や教育社会学の視点をあわせもっていたことに由来するだろう。特に第四章と第五章における家族内衛生ヘゲモニーのあり方の分析は、家族社会学

の視点なくしては成り立ち得なかったであろう。

本書の終章における問題意識、すなわち衛生経験のミクロレベルでの多様化とそこから生じる大衆の管理への「抵抗」の慣習行動を分析することは今後の衛生史・社会医学史における重要な課題の一つである。著者がその課題をさらに発展させていくことができる力量をもっていることは本書の存在によって証明できたといえる。時に余りに舞台装置に手が込んで通底すべきドラマツルギーがやや散漫になるきらいがあることを克服して、さらなる大業を成し遂げられることを望んでやまない。

(瀧澤 利行)

[東信堂, 〒113-0023 東京都文京区向丘 1-20-6,
TEL. 03 (3818) 5521, 2010年2月, A5判, 315
頁, 3,800円+税]

田口喜久恵 著

『近代教育黎明期における健康教育の研究』

本書は田口喜久恵氏の日本女子大学における博士論文「近代日本における学校教育草創期の健康教育—近代学校教育における子どもの〈身体・健康〉への認識過程を中心に—」に加筆修正し、改題した著作である。

本書のあとがきにも記されているように、本書のもととなった学会誌におけるモノグラフなど（その最初は日本学校保健学会機関誌「学校保健研究」第30巻3号、1988年とみられる）の刊行から教えれば提出までに20年の年月を要している。もちろん、その処女論文の作成に要した期間を加えればさらに数年を加えねばなるまい。その意味からだけでも本書は著者にとっては「大業」以外の何者でもあるまい。その間にも著者が日本学校保健学会、日本教育学会、教育史学会などで学会発表を地道に続けてきている姿を評者は知っている。といって、それは長年の知己の学位取得と著書刊行という私的な感慨に留まるものではな

く、時を前後して刊行された七木田文彦氏の『健康教育教科「保健科」成立の政策形成—均質的健康空間の生成—』（学術出版会）や宝月理恵氏の『近代日本における衛生の展開と受容』の刊行と合わせて考えると、少なくとも今時の人文・社会科学における身体・健康・衛生などへの関心の強さが追い風となっていることを物語っている。

本書の構成は「序章 問題の所在と課題」「第I章 「学制」以前の医学教育」「第II章 近代学校教育における近代的「養生法」の導入」「第III章 近代学校草創期における「養生教育」の実際」「第IV章 〈身体・健康〉教育の展開基盤—「養生法」以外の〈身体・健康〉教育—」「終章 近代教育草創期の〈身体・健康〉教育の存在」の6部構成となっている。

本書を医史学の著作とするか否かについては意見が分かれるであろう。著者の問題関心は、著者が本来専門とするところの学校保健・健康教育の